

琉球大学学術リポジトリ

ケアリングを土台にした教育実践の探究

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2022-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西山, 智海 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017951

ケアリングを土台にした教育実践の探究

西山 智海

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・うるま市立田場小学校

1. テーマ設定の理由・目的

(1) 問題の所在

沖縄県内の小中学校において、いじめや不登校は増加の一途をたどっており¹⁾、自閉症・情緒障害特別支援学級に通う児童生徒数も急増している²⁾。これらを反映するように学級には、教室を飛び出す児童や他者を暴言・暴力で傷つける児童、特定の子を排除・拒否する児童、他者と関わりを持つとしない児童、学習に向かおうとしない児童、不安定な生活の中、登校できない児童の姿がある。もちろん、私たち教師は子どもの人格形成や自己実現へ向けて、よりよい方向への変容と成長を願い、指導をしている。しかし、その指導は子どもたちへと届いているのだろうか？

私の学級での営みを考えてみよう。一昨年担当した1年生の教室で、授業中に児童が手を挙げたときのことである。手を挙げているその子に気が付き、「～さん」とその子に発言するように促した私が、次に発した言葉は、「姿勢！」であった。それからその子は口を閉ざして二度と発言しようとしなかった。また、毎日生活態度を注意されている女の子は、ある日、もう私とは目を合わさなくなり、無表情になってしまった。もちろんこれらは私の関わりの不十分さや教師としての力量不足を示す事例になるのだろう。だが、ここが学校でなければ、私は同じようなことをしたのだろうか？大切にすべきものは、男の子の「姿勢」よりも伝えようとした気持ちであり、女の子の生活態度への注意よりも、その生活の背後にあるものへのねぎらいを含めた関わりであったはずである。子どもの存在を包括的に捉えケアしようとするのが、なぜ学校ではできなくなってしまうのだろうか？

(2) 近代学校の性質

しかし、そもそも学校において教師が子どもをケアする関係は存在しえるのか、という本質的な問いもあるだろう。教育社会学者の長谷川裕(2014)は、学校＝近代学校の原理的な性格を検討しつつ、以下のように述べている。長谷川はまず、近代学校とは前近代から近代にかけて、共同体が子どもを育てる自明の基準が存在していた中から、「人間形成それ自体を目的とした固有の社会過程が誕生し」、学校とはいわば「自立して生きていく個人を形成する」場所になったのだとする。そのような場所においては、多数の子どもに対しての集団的・組織的な教育が進められるため、「管理＝経営」の必要性が生じる。それは教師たちの活動を統制し、生徒とされる子どもたちもまた教授・生活過程において統制される存在として現れることになる。そのように管理される空間においては、子どもたちは評価され、選別されるまなざしの中に絶えず置かれてしまう。一方で学校は子どもを勉強させるために、健康に気を配り、食事を与えるなどの福祉的機能を持ち合わせもする。さらにそうした場所に子どもたちが一堂に集められることにより、教師と子ども、子ども同士の関係性が取り結ばれ、その関係性を生きることは、子どもにとって重要な人間形成の作用を及ぼすことになっていく。このように考えると、管理＝経営の側面を持ちつつも、その健康や関係性に気を配るケア的機能を内包するというのが、近代学校の本質的な性質だといってよいだろう。それらを踏まえて長谷川は、人が主体性・自律性をもって個人として生きていくためには、「存在論的安心」の構築とその維持が必要であるとする。それは「その人の存在が尊重されるケア的な関係性のなかにおかれることで個人の内に築き上げられ維持される感覚であり、世界を、またそのなかにいる自分を安んじて受容できる感覚」として、個人化した個人の生は、「関係性によって構

築・維持される存在論的安心という心理的な拠点の上に初めて成り立つものである」と述べる。要するに、教育が目指すものは、その社会を生きる主体的な個人の育成であるが、だからこそ、それは人との関わりによってのみ生じる存在論的安心なくしては達成されないということになる。

(3) N. ノディングズのケアリング論

このように考えると、教育という営みを考える者にとってケアの側面をどのように捉えるのかはまさに中心的事項になるといってよいだろう。教育哲学者であるネル・ノディングズ(Noddings, 1984=1997)は、人間の実相や目標は、ケアしケアされることとする。そして彼女は、教育の目標それ自体を「自分に対する、また自分の触れ合う他のひとに対するケアリングを維持し、高める」ことだとしている。ノディングズは、学校は、教師が子どもをケアする場であると同時に子どもがケアし、ケアされる者になってゆく場であり、ケアリングを通して「倫理的理想」を育てていくことが求められるとする。学校教育における様々な営みは、「ケアリングを豊かにできるような諸条件」を「維持していく」ことだとする。また、個々の倫理的理想を減殺させ、育むことを困難にする方法は、「倫理的理想を危険にさらすかもしれない手段を提案」することであり、学校教育において営まれるべきことがらの「危険なほどに優先順位を取り違えている」事態ということになる。

(4) 研究の目的

まさに、学校が見失っていたものは、人間が相互依存的であることに着目し、何においてもまず子どもを「受け容れる」ことが先にあるということではなかろうか。人間はケアされることを通して、人格発達、信頼感の基盤を獲得していく。私たち教師は何度も実感していたはずである。注意や指導の声は届かないが、「悲しかったね」「どうしたの？」の声は子どもたちに届くことを。以上のことから本研究の目的をN.ノディングズのケアリング論を手がかりにして、教師は子どもとどう関わり、どのように授業をつくれればよいのかを実践的に実現していくすじみちを考えていくこととする。

2. 研究方法

(1) N. ノディングズのケアリング論の整理

(2) ケアリング論をベースにした子どもとの関わり・授業への考察

3. 研究内容

(1) ケアリングの関係とは

ところでノディングズのいう「ケアリング」とは、何を意味しているのだろうか。ノディングズは、ケアするひととケアされるひとの関係性に特段の注意を払っている。ノディングズのいう関係性とは、たんなるひとのつながりや出会いとは異なるものである。ノディングズ曰く、ケアリングが成立するときには、ケアするひとのなかに、「専心没頭」と「動機の転移」という現象がみられ、「専心没頭」とは、「そのひとが感じるがままを感じ」、「ケアされるひとにとって真に必要としているものを問う」ことである。「動機の転移」とは、「相手を統制することを断念し、「とりつかれるままに身をゆだね」、「動機づけるエネルギーが他者と他者の課題に向かうこと」であるという。こうした目の前の他者の存在の受け容れをベースにすることによって、ケアされるひとの「ケアするひとに対する直接の応答」か「ケアするひとが目の当たりにする自発的な喜びや幸福に満ちた成長」等によって、ケアリングが受け容れられたことが示される。要するにケアするひとである教師の本当の報酬は、ケアされるひとの応答であり、それを受けることによって教師は倫理的な自己になっていく。

(2) ケアするひとである教師の子どもへの関わり

こうした教師と子どものケアリングの関係は、教育実践という場でどのような姿で現れているのだろうか。ここではそれが現れていると思われる、森山良太先生の実践(2022)の検討を通して考えてみたい。

森山は、沖縄県内の児童数約 900 人規模の公立小学校において普通学級担任をしている。ある日の授業時間、二人の教師に両腕をつかまれ、職員室前の廊下で「離せ！離せ！」と泣き叫んでいる特別支援教室在籍で 3 年生の真治の声に森山は気づく。森山はそこに駆け付け、真治の手をつかむ教師に「もう放してください。ぼくが真ちゃんにつきあいますから」と告げる。教師が手を放すと、真治は一目散に校舎から飛び出し、施錠された校門を乗り越え、校門を出てすぐの民家の駐車場奥に入って、涙を拭い立ち尽くす。真治と同じように涙を流していた森山は涙を拭くと、真治に静かに声をかける。「真ちゃん、ぼくは掴まえたりしないからここにいていい？」森山の声掛けに真治はうなずく。10 分ほど待っていると、森山の隣にやってくる。森山が「いやなことがあったんだよね」と声をかけると、真治は「つかまれたこと」とつぶやく。森山の「つらかったね。嫌だったね」という声に、真治は森山のお腹に頭をよせて「授業おもしろくないんだもん」とつぶやく。それから二人で蟻の行列を見ていると、真治が「桑の実、もうついていないんだよ」と話し出し、ふたりは校庭へと戻る。桑の木をふたりで見上げていると、真治は「ほら、実はないでしょ」と言い、今度は鳴くせみを見て「せみがたくさんいるねえ。でも高くは捕れないや」とつぶやく。雨が降り出し、二人は校舎の軒下で雨宿りをしていると、真治は空を見上げ「もう戻ろうか」と自分から言い、「じゃあね」と手を振って授業の始まった教室に戻っていく。

森山実践は、ケアリングの観点からどのように読み解かれるのだろうか？ケアリングの関係は、「ケアするひとの専心没頭や動機の転移を要求し、ケアされるひとの受け容れや自発的応答を要求する」ものである。ケアされるひとの受け容れ（認識）や応答は、「自分自身の考えに自由で活気がある」「自発的に人目を気にせず自分を明かす」等の姿で現れるとノディングズは記している。森山の真治の泣き叫ぶ声に駆け付け、「指導」していた教師の手を放させる姿には、真治の痛みや怖れを感じる「専心没頭」があり、その後の行為には、それに応じる行いへ身を委ねていく「動機の転移」が見られる。それは、教室に戻すことを問題解決と捉え、規則に準じて真治の行動の変容を迫るのではなく、まず真治の側にいてよいか真治に尋ね、真治のそばで 10 分間待ってやがて真治自身が森山のそばに近づいてきたように、真治自身の気持ちを大事にした「相手本位」の行為である。森山は、ケアされる主体（「汝」）として真治に出会っているのであり、教師としての森山自身でありながらも、真治と共に見たり感じたりできるものとしての 2 重性を持っているから、ここにおいて真治は森山を受け容れて応答し、その応答により森山はケアをし続けることができた。そして真治の「授業つまらないんだもん」の言葉は、真治が「真に必要なとしているもの」（苦しみの中からの願いや要求、葛藤）を表しているといってもよいだろう。ケアリングの関係であるからこそ、真治の声は聴き取られ、自ら教室に戻るという形で、「自分の役割を吟味し始める」ことができた。さらに森山が、真治の行動には理由があったと捉えていることも重要な点である。森山は「子どもの事情より学校スタンダードを優先する教師の指導」は「子どもの声を奪う」と書き綴る。森山が真治の声に応答できたのは、森山自身が教師である自分の「自己の自由と不自由さに敏感」であり、「自己のひそかな声に耳を傾け」ていたからであったのではないかと私は考える。森山が真治という「他者の生命の『現れ』」に応答し、それに参加することを通じて、森山自身もまた「生きるに値する世界を他者とともに編み上げていく」ことができたのではないだろうか。そういった意味で、森山もまた真治のケアを通して自己のケアを実現したともいえるのではないだろうか。

(3) ケアするひとである教師の教室・授業づくり

続いて、授業を通じたケアについて考えてみたい。ここでは、対話を通してケアリングの関係を築き、学びをつくり出している原田真知子先生の実践（原田 2021）を検討する。

児童数 1000 人を超える神奈川県公立小学校 6 年担任の原田は、「授業妨害、同級生への暴言・暴力、器物破損」等をして、前年度まで荒れていた哲也を受け持つ。原田は英志を中心とした子どもたちと共に哲也の言葉を聴き取り、哲也の兄の暴力における苦しみと「救いを求める声」に出合う。2 学期になると原田は、国語の授業を「学級討論会」に軸を置く。幾度目かの討論会で、原田は「校舎の窓ガラス

わざと割ったら親が弁償する」という見出しの新聞記事を討論の論題とする。「親が弁償することにより、親がその行為について子どもを叱ることができる」という意見に対し、英志は「わざと窓ガラスを壊した子は、それほど悩みが大きいんだと思うから、怒っただけでは解決できない」と言う。哲也は学校が払うと「税金の無駄遣い」になり、反論を受けても「税金は困っているひとのために使われるべき」と主張し続けるが、「でも生活が苦しい人の子どもがガラスを割ったらどうするんですか？」の声に「あっ、そうかあ」と納得する。カイは、窓ガラスを壊した子に心を寄せ、「ぼくは、5年生のときにちよつとそういうこと（いじめ）があって、だけど家に帰ってきてお母さんとかお父さんとか見ると、そういうことは忘れちゃって、家にいるから安心、ってなって、親には言いづらくて、親には言えないから……だけど学校ではずっとやられてたから、学校は気づくべき……気づいてほしかった」と語る。

原田の実践を、ケアリングの視点からどう捉えることができるだろうか？哲也が「真に必要としているもの」は何かを問おうとする原田に対して、哲也は家でうけている兄からの壮絶な暴力を語りだす。まずこの点に、ケアリングの関係をみることができる。それは、哲也が何を考え、どうしてそう考えるのかを探っていく子どもたちもまた、哲也に対するケアリングの関係を持つと言える。このような教師と児童、児童と児童とが互いの思いを受け容れ、語り、聴き合う教室において、ノディングズが述べる対話の目的「他のひとを理解し、他のひとに出会い、ケアを行う」ことをみることができる。さらに討論の授業における、「わざと窓ガラスを壊した子はそれほど悩みが大きい」という英志の発言や、他の人の意見を聞いてこれまでの主張を哲也が崩していく姿や、学校は子どものトラブルに気づくべきというカイの発言は、「窓ガラスを割る」という行為を善悪の基準で判断するのではなく、それぞれが自分の体験と重ね合わせながら、窓ガラスを割ってしまう見えない他者がどのような生活を送り、どのような思いや痛みがあるのかといった生活背景に思いを寄せようとする専心没頭を見ることができる。こういったやりとりからは、「子どもたちがこの世界でケアするひととしてケアされるひととして生き」ていくかを学んでいくことが教育の目標とするノディングズの主張を見出すことができるとともに、授業のなかからケア的な関係を豊かにしていく道もあることがわかるだろう。

4. 今後の研究

ケアリングの視点から現在の学校教育について考察し、教師が子どもに対してどのように関わり、授業をどうつくりあげていくかについての整理が可能だと手ごたえを感じている。今後は、ケアリングの理論について理解を深め、実践の現場における教師の在り方をより具体的に描き出していきたい。

注釈

- 1) 2019年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、県内のいじめ認知件数は1万4895件、不登校者数は4630人で過去最多となっている。
- 2) 10年間で12.5倍に急増。<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/619672> (2022.1.8 取得)

引用文献

- 原田真知子, 2021, 『「いろんな人がいる」が当たり前の教室に』高文研。
 長谷川裕, 2014, 「近代学校という制度」『学力と学校を問い直す』かもがわ出版。
 森山良太, 印刷中, 「思考を止めない覚悟」『沖縄子ども白書』かもがわ出版(2022年刊行予定)。
 Noddings, N., 1984, *Caring: a feminine approach to ethics and moral education*, Berkley: University of California Press. (立山善康・林泰成・清水重樹・宮崎宏志・新茂之訳, 1997, 『ケアリング 倫理と道徳の教育—女性の観点から』晃洋書房。)
 竹内常一, 2016, 『ケアと自治 新・生活指導の理論 学びと参加』高文研。